

今村楯夫、真鍋晶子 著 『ヘミングウェイとパウンドの ヴェネツィア』

彩流社
2015年、228pp.

菊地利奈

Rina Kikuchi

滋賀大学 経済学部 / 准教授

本書は、日本でもよく知られるアメリカ人作家、アーネスト・ヘミングウェイ(1899-1961)と、同じくアメリカ出身の詩人エズラ・パウンド(1885-1972)という、ふたりの親友と呼ぶにふさわしい文豪と、ふたりが愛した水の都ヴェネツィアとの関係を探究する文学研究書である。

ここで「文学研究書」と書いたが、本書はく従来の文学研究書とは一味違う。従来の文学研究といえば、研究者が一人で部屋に籠って文学テキストを読み、それを分析することであったわけだが、本書は、ふたりの著者が部屋からでて研究対象の土地ヴェネツィアにでむき、そこで多くの、それも分野を超えた研究者や関係者と議論をかわし情報を提供しあい、ヘミングウェイやパウンドが体験したヴェネツィアを、ヘミングウェイとパウンドの目を通して体験したことから生まれた文学研究書なのである。

ヘミングウェイとパウンドというふたりが並んでいることを、不思議に思う読者もいるかもしれない。しかし、このふたりは生涯の友であった。パウンドは無名のヘミングウェイの作品出版を援助した恩師であり(本書8-9頁)、ヘミングウェイはパウンドを「不変の親友」と呼んだ(同17頁)。なかでも、本書で紹介されるパウンド救出エピソードは心を打つ。パウンドは、第二次世界大戦中のファシズム主義のせいで、大戦後、ピサの収容所に収容されていた。そのパウンドに宛て、ヘミングウェイは「あ

なたが絞首刑に処せられるなら、私も直ぐに飛んで行って、自分も絞首刑にされましょう」(同213頁)と手紙を書く。そして、13年もの間拘束されたパウンドのために、ヘミングウェイが策を練り奮闘し続けたことが、本書で明かされている。

本書は、大きく二部にわかれる。第一部は、日本ヘミングウェイ協会顧問で、日本におけるヘミングウェイ研究の第一人者である今村楯夫が執筆する。今村は、『河を渡って木立の中へ』(1950年)という、一般的にはほとんど知られていない長編小説に注目して、ヘミングウェイとヴェネツィアの関係を読み解いてゆく。本作品の日本語訳は1952年に出版されているが、その後は全集に収録されたのみで、『老人と海』や『武器よさらば』のように簡単に手に入る作品ではない。知名度が高くない作品であるうえに、ヘミングウェイ研究のなかでも長年失敗作と考えられてきた作品だ。

今村はこの作品の舞台として描かれるヴェネツィアを自らの足でめぐり、ヘミングウェイ自身の自伝的要素と組み合わせながら、作品を読み解き、新解釈を展開する。今村は自分でつぎとめた史実に基づく「事実」と作品の中で描かれる「虚構」の差異に着目し、これまで明らかになっていなかった作品中の謎を次々と解明し、再評価する。それらは、著者が現地にでむかなければ絶対に解明できなかった内容ばかりだ。現地に赴いたことで「史実に基づく事実」を確かめることができた今村は、へ

ミングウェイの作品中の「虚構」とその史実に基づく事実との「差異」から新しい解釈を導き出せたのである。文学研究者にとって、その場におもむき「(作品の舞台を) 体験」することがいかに重要か、痛感させられる。

後半の第二部では、本学部教授の真鍋晶子が、パウンドの詩作品にちりばめられている＜パウンドのヴェネツィア＞を、今村同様、自分の足で追う。文学作品には、その作品の生まれたバックグラウンドを知らなければ理解できないものがある。パウンドの代表作『詩篇』はその好例といえるであろう。作品を読み理解するためには、膨大な知識が必要になる。迷える読者を導く案内人として、真鍋は『詩篇』を引用しながら、ヴェネツィアを歩くのである。いやむしろ、自身が心惹かれた『詩篇』の一節を追い求めてヴェネツィア徘徊し、「パウンドの言葉を通して、場所や『もの』を見、再体験」(同122頁)していく自分の心を描くことによって、真鍋は読者の案内人になったといったほうがふさわしいかもしれない。

具体例をみてみよう。真鍋は、『詩篇』によまれた、パウンドが愛人オルガと過ごした「秘密の巣」と呼ばれる家の前にたつ。そして、「詩篇七六」から以下の二行を引用する(本書154頁より引用)。

秘密の巣、タミの夢、厚い板で綴じられし
偉大なるオヴィデウス、そして浮き彫りイゾッタ

この「名詞の羅列」ともみえる二行から、読者はなにを読みとればいいのかであろうか。真鍋は、ふたりの「秘密の巣」に「タミの夢」という日本人画家久米民十郎の大きな絵画が飾られていたこと、パウンドの愛読書、古代ローマ詩人のオヴィデウスの作品『祭暦』の貴重な木製カバー本があったこと、パウンドが理想の君主像だと考えていたジギスム

ント・マラテストの妻であったリゾッタ・デリ・アッティの大理石のレリーフ像が家の壁にセメント付けされていたことを説明し、この四つの名詞の関係性を解明する。修飾語を究極の形で排除すると、詩はこのような「名詞の羅列」になる。これがモダニズム詩といわれる詩の特徴でもあるが、「もの」を提示することで、そのものがもつ「美」を伝えることがパウンドの求めた詩だったのかもしれない。真鍋は、ここに並ぶ後者三つの「もの」が「その伝統の流れのなかでパウンドが高く評価した高度な芸術、文学、思想」を表出していることに着目し、ここに、パウンドの詩に一貫して流れる哲学、「普遍・不変の価値をもった芸術、文学、思想(中略)」は、古代から脈々と受け継がれるべきものであり、時の流れの最後の先端にいる自分たちはその高度な伝統を継承すべきだ、ただし、古いままの伝統ではなく現代にふさわしい新しい形の芸術を生みださなければならない」を読みとる(同157頁)。「タミの絵」が大戦中に裁断され画布としてイタリアの画家に分配されたことや、パウンドと画家久米との関係にまで調査を広げる真鍋の研究者魂が、真鍋に「パウンドの目」を与え、パウンドの目を通して街を、家を、絵を見ることを可能にしているといえる。

このように、案内役がなければ言葉の迷路に迷い込んでしまう難解なパウンドの詩句を解明し、読者の作品理解を深めることは、もちろん文学研究上大きな貢献である。しかし、もっと重要なことは、今村、真鍋の両者が「文学作品を体験すること」のすばらしさを、身をもって体験した自己の体験を通して伝えていることではないか。この点について、読書に関する「想像力」と「知識」の二側面から考えたい。

一読者が作者の「言葉を通して場所や『もの』を見、再体験する」こと。これこそが、大江健三郎

が解いた「異化」であろう(『新しい文学のために』1988年)。私は、両著者が本書で伝えているのはまさにこのことであり、作品を体験することで知る、文学作品を読む喜びなのではないかと思う。

大江の説明する「異化」にはさまざまなレベルがあるが、ここでは、読者側の「異化」についてだけ考えてみたい。読書とは一読者が作者の「ことば」を異化し、「胸にきざみつけ」、「思いを共有し」、そのことによって作品に描かれるものが読者の「ものになる」ことで成り立つものであり(同47-48頁)、このために必要になるのが「想像力の働き」(同72-73頁)だと大江は述べる。言い換えれば、作品を読み、作中に描かれたものを共有し、その描写を「自分のものにした」と思うことが読書の醍醐味であり、読書を楽しむためには「想像力の働き」が必要不可欠ということになる。

とはいえ、言葉でいかに説明しても、このような読書の楽しみなるものを教えることは困難だ。教育現場では想像力を養うための読書が奨励されているようだが、「このように読み、主人公の気持ちになって考え、このように感じましょう」などと指導されては興醒めである。「想像力の働き」を身につけ、読書の喜びを味わいたい人にこそ、真鍋が「パウンドの言葉を通して、場所や『もの』を見、再体験」(本書122頁)していく様子を読んでもらいたい。あるいは、今村がヘミングウェイの作品舞台の「事実」をつきとめるために、執拗に現場を追うドキュメンタリー風の文章にふれてほしい。こんな風に本が読めることができれば読書がいかに楽しいものになるか、手に取るようにわかるからだ。

しかし、大江も述べるように、読書は「想像力」だけでは成り立たない。往々にして文学作品は、読者のほうに「予備的な知識」がなければ「よくわからない」ものになってしまうものだからである(大江55頁)。このことは、すでに引用したパウンドの詩

篇の一節からも明らかであろう。本書における今村と真鍋は、知識と想像力の両方を備えた、ヘミングウェイとパウンドの案内人なのである。

さまざまな特色を備えた文学書である本書には、もうひとつ、記載すべき重要な点がある。それは本書が多くの研究者の交流から成り立っていることである。昨今、学際的な交流が盛んに求められているが、文学研究は今でも研究対象の作家によって分断されすぎている。しかし、ヘミングウェイ研究者とパウンド研究者である今村と真鍋は、そのような悪しき伝統の壁をやすやすと越え、同時代を生きたふたりの文豪の交流顔負けに交流しながら、研究を深めている。今村がつきとめられなかった謎のピアニスト、レナータ・ボルガッティがオルガの伴奏者であったこと、オルガが初めてパウンドに出会った場所にオルガを招待したのもこのピアニストであったことが、真鍋によって明かされる(本書173頁)。「異なる分野」のふたりの研究者の交流により、謎だった点が線へとつながってゆく。今後、このような文学研究のあり方がひろがっていくことを、文学研究者のひとりとして願ってやまない。

